

## 暁

堀尾 トメ

花より明くる春の曙やうくはれ行く霞の間から  
顔さし出す紫の山、ほんとうに百敷の大宮人の花折  
りかざした、らうたき姿にも似てゐるではないか。  
月の宿りを怪む夏の朝露を帶びたる籬の牽牛花は端  
に詠めてゐる雅人のやうで、肌心地のよい朝の風は  
今し雅人を襲はむとする炎帝の猛威を拂ふ準備をして  
ゐるのだともみえる。

残んの月に置く霜白き秋の暁、狹霧の奥に聳え立つ  
たる山の姿は彼の俗塵を離れて高き君子にもたと  
へられるやうで、身にしみ渡る清き風はその養ひな  
した盛徳が天地の間に擴充するのだとも思はれる。  
野寺の鐘の聲汎えてあたり静けき冬のあかつき、野  
山に家に庭に降りつもつた、たゞ白妙なる雪の心こ  
そ實に一切衆生を濟はむとする平等無差別、一視同  
仁なる佛の御手とも仰がれるのである。

景物としての暁は上記の通である次に少しく人事

としての暁を述べやう。

玉を綴つてゐる朝露は充實の相である。茜さし出  
る旭の光は希望の色である。暗黒の帷開けて光明の  
世界が將に來らうとしてゐる。竹院瀟洒たる處こゝ  
にここに尙友の人がある、板橋霜白い處こゝに遠征  
の家がある。煙突煤なき處こゝに就職の工人があ  
る、物質界精神界に於けるあらゆる人事の活動は今  
起らうとするのである、個人社會進歩の一過程は今  
始らうとするのである。

朝露のかげは虚偽の相である旭の光は墮落の色で  
ある、桔槔鳴る處こゝに粉黛を裝ふ少女がある。車  
馬轟轟たる處、そこに金鎖を飾る才子がある、器皿  
相觸るゝ處こゝに口腹の奴隸となる無賴漢がある、  
物質界精神界に於けるあらゆる人事の墮落は今起ら  
うとするのである個人社會の淫靡退歩の一過程は今  
始らうとするのである。あゝ』

□

□

□

(72)

## 校庭の春

(二階の廊下の窓か  
ら運動場を見る)

緑と紅のしばりに崩え出た紅葉の若葉、その蔭か  
らのぞく櫻はもう力の限り花を咲かせたやうに美し  
く、あたりに何となく春の光が満ちて居ります。ボー  
ルは小鳥のやうな皆さんの心を奪つて、あちらへ飛  
び、こちらへころがり、はては枝のたわんだ紫陽花の  
根もとに走り込んで、皆さんを困らせて居ります。や  
つとボールが親の手元近く運ばれるど見るまに、丈  
のお高い方が受取つて遠くむかふにお投げになりま  
した。小さい方は飛び上つて取つて、又反対の方にお  
投げになります。持つて生れた務とは申しながら、  
ボールも可愛そうになど思つてゐる間に、何時何處  
からお出でになつたのか、伊藤先生が漏斗を持つて、  
大きく8の字を書きながら水を蒔いていらつしやい  
ます。水は立ち上るほこりを沈めて、心持よく地に  
しみこんでしまひます。先生は時々御手をお休めに  
なつて、御嬉しそうに皆さんの元氣な御様子を御覧  
になつて、又8の字を繰り返していらつしやいま

す。この間まで北風になんだけこの窓から見下せば、  
右手の方、家根と窓ばかりよく見える教官室のわき  
のプランコに乗つて、この騒ぎも御存じないやう  
に、ゆら／＼と前後にふられながら、ゆつたりと青  
い空を眺めていらつしやるのんきさうな方もあれ  
ば、こちらの臺に腰掛けて、足をぶら／＼させなが  
らお話をしいらつしやる方もござります。私共が  
二年の春、戸たてぐもの巣を見つけようと苦心した  
のそばの腰掛に集つた五六人の面白さうな笑ひ  
声も折々はれやかに聞えてまゐります。正面に一き  
躊躇の木のあたりは、又青々と若草に包まれて、そ  
ならぶ寄宿舎のむかふから、すつくりと一本高く見  
える櫻は今真盛りで、自ら目を引かれます。お茶の水  
の川ぶちの櫻は多くの人にもてはやされますが、い  
たづらな子供の爲に悲しい思ひをして居ります。そ  
れを思へば、毎日學德の高い本校の方々に愛せられ、  
名歌名文にのぼるこの櫻こそ、誠に幸なのでござ  
います。このやうなことを思ひながら、ふと元のと  
ころに目を戻しましたとたんに、すつと上つたボー

(73)